

花瑛塾

神苑の決意

本号の内容

〔追悼〕三島由紀夫と葦津珍彦 「英霊の声」と「怨霊の声」
（木川智）：1／〔解説〕安倍・プーチン日口首脳会談開催―「外交の安倍」が功に焦ったか―（高井七海）：4／〔解説〕日産グリーン元会長逮捕司法取引実施 「共謀罪」初適用も間近か（西山徹）：6／〔連載〕アジア放浪記―歴史を掘り起こし日本を見る 台湾編⑥（仲村之菊）：8／一―月活動報告：9／お知らせ・編集後記：20

1部 1000円
（別途送料160円）

三島由紀夫と葦津珍彦

「英霊の声」と「怨霊の声」

神苑の決意 主筆 木川智

◆ 怒りと怨みの長歌

〔追悼〕前号では、「楯の会」事件から四八年を記念し、戦後神社界を代表する思想家・言論人である葦津珍彦氏の「楯の会」事件評を紹介するとともに、葦津氏ら戦後神社界の再軍備批判から見える「建軍の本義」論と、三島由紀夫氏ら「楯の会」事件で問われた「建軍の本義」論について確認することにより、事件によってみずから命を絶った三島氏・森田必勝氏の慰霊・追悼とした。今号では、同じく葦津

氏による三島氏「英霊の声」評を振り返り、葦津氏が問うた神荒ぶ霊たちの慰霊・鎮魂や、「英霊の声」の背景にある日本史上における忠臣の「忠誠と叛逆」を確認し、そこにおけるアウト・ロウ（法外の人、浪人の道）の系譜と葦津氏の右翼観を確認し、三島氏・森田氏の慰霊・追悼としたい。そもそも「英霊の声」は、雑誌『文芸』（昭和四一年「一九六六」六月号）に発表された三島氏の文学作品である。作品のあらすじは、「帰神の会」に参加した主人公の「私」が、審神者を務めた木村先生の

降霊術によって盲目の青年・川崎重男に二二六事件で処刑された青年将校の霊や特攻隊の隊士の霊が憑依し、川崎青年の口を借りて霊たちが昭和天皇への激しい思慕と、戦後の日本への憤りを述べ、「などてすめろぎは人間「ひと」となりたまひし」と繰り返す絶叫する場面に立ち会おうという、非常にショッキングな内容となっている。さらに物語の最後で川崎青年は絶命するのだが、その死に顔が「何者とも知れぬと云はうか、何者かのあいまいな顔に変容してゐ」たため、その顔は誰の顔なのか、様々な推測が